

## I 研究主題と副題

# 確かな学力を身に付ける学習指導の研究 ～読む能力を育む学習指導の工夫を通して～

## II 主題設定の理由

### 1 社会の情勢から

様々な情報が氾濫し、時代が急激に変化する現代において、子どもたちの学力低下や規範意識の低下、人間関係の希薄化等見られる中で、学校教育が果たす役割はますます大きなものとなっている。学習指導要領が示す「生きる力」とは、「自ら課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決できる力」、「自らを律しつつ他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」である。この「生きる力」を育成するためには、「知識や技能を身に付け活用する力、学ぶことへのやる気・意欲、自分で考える力、自分で判断する力、自分で表現する力、問題を解決し自分で道を切り開いていく力」などの資質や能力により形成される確かな学力を身に付けさせる必要がある。

OECD（経済協力開発機構）が実施した生徒の学習到達度調査（PISA2003）の結果を見ると「読解力」の得点においては、OECD平均程度まで低下している状況にあることがわかる。また、国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2003）の結果を見ると、「学校外での一日の時間の過ごし方」として、「宿題をする時間」が調査対象国中最も短く、「テレビやビデオを見る」時間が最も長いなど、大きな課題が示された。そこで、目的や意図に応じて文章を読み、広い範囲から情報を集め、効果的に活用する能力を身に付けさせるとともに、読書を生活に役立て、ものの見方や考え方を広げ、自己を向上させようとする態度を育てる必要がある。

### 2 高原町の児童生徒の実態から

昨年度、高原町の教職員に対し、「確かな学力を身に付けさせ、学力向上に努めるには、『読む能力、書く能力、計算の能力、コミュニケーション能力』の4つの中から、どの能力が必要であるか」を選ぶアンケート調査を行ったところ、50%以上の教職員が「読む能力」が必要と答えた。このことから、高原町の児童生徒の実態として、「読む能力」の育成が必要とされていることが分かった。そこで、「読む能力を育む学習指導の工夫」を行った。

そこで、実際の学力を把握するために、「読む能力」の学力分析を行ったところ、昨年度は高原町内の児童（小学校2～6年生）・生徒（中学校1～3年生）においては、小学校2年生のみが、大領域の「読むこと」の通過率が全国通過率を上回っていた。今年度は小学4年生を除き、その他の学年、中領域ごとの通過率においては、全国通過率とほぼ同率もしくは、上回ることもあった。少しずつではあるが「読む能力」の向上が見られ始めている。しかし、細かく見ていくと児童生徒とともに、場面・情景・心情を想像して読むことや語句の意味を把握することを苦手としている傾向が見られる。

これらを踏まえ、読み取る能力を高める活動を授業に取り入れるとともに、児童生徒に文章を読むことの楽しさや達成感を味わわせる手立てをとることが大切であると考えた。そこで、主題を「確かな学力を身に付ける学習指導の研究」とし、副題を「読む能力を育む学習指導の工夫を通して」と設定した。

## III 研究の目標

高原町教育研究所では、昨年度より「確かな学力を身に付ける学習指導の研究」を主題に「読む能力を育む学習指導の工夫」を通して研究に取り組んでいる。1年目の研究として、町内の児童生徒に「読む能力」の学力分析や読む能力を高めるための指導方法の工夫や読書活動の推進を行った。今年度は研究の2年目として、昨年度の研究を踏まえつつ、引き続き「読む能力」に焦点をあて、読み取る能力を高める活動を授業に取り入れるとともに、文章理解の基本は「声に出して読むこと」つまり、「音読」であると考え、言葉や文を目で捉え、口を動かし、耳で確認するという活動を通して、より正確な理解につなげたいと考えている。

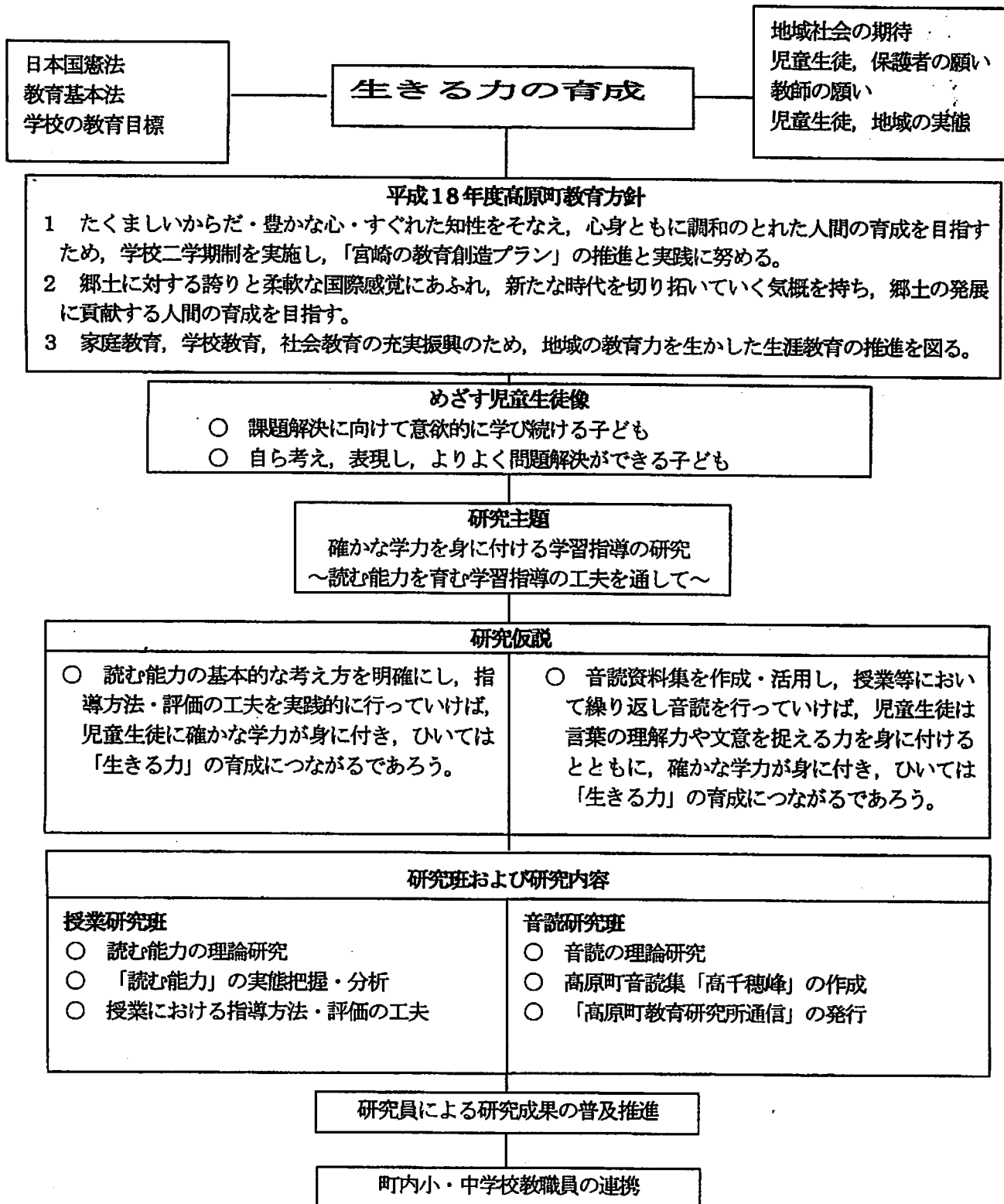
また、「読む能力」を「意欲的に読書しようとする態度や文章の内容を目的に応じて的確に読み取り、自分なりの考えをもつ力」と捉え、読み取ったことに関して、お互いに感想を述べあったり、批評・評価を行ったりするなど、「伝え合う力」の育成も目指している。

また、高原町独自の「音読集」や高原町教育研究所通信等の作成・配付を通して、町内に本研究を広げ、全児童生徒の学力の向上を図りたい。

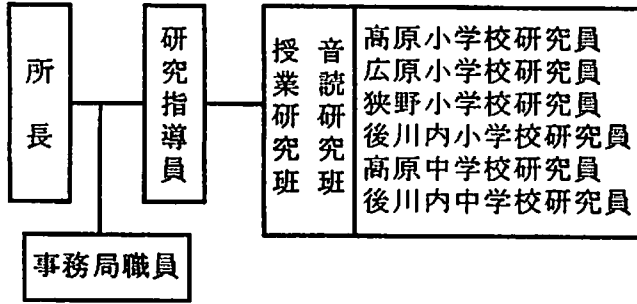
#### IV 研究の仮説

- 読む能力の基本的な考え方を明確にし、指導方法、評価の工夫を実践的に行っていけば、児童生徒に確かな学力が身に付き、ひいては「生きる力」の育成につながるであろう。
- 音読集を作成・活用し、授業等において繰り返し音読を行っていけば、児童生徒は言葉の理解力や文意を捉える力を身に付けるとともに、確かな学力が身に付き、ひいては「生きる力」の育成につながるであろう。

#### V 研究の全体構想



## VI 研究の組織



- 所長は教育長が兼ねる。
- 事務局員を1名兼任し、町予算の執行を担当する。(教育総務課)
- 研究指導員は、所員の研究指導業務に当たる。
- 研究員は原則として、各学校1名とし、隔週毎に研究に当たる。

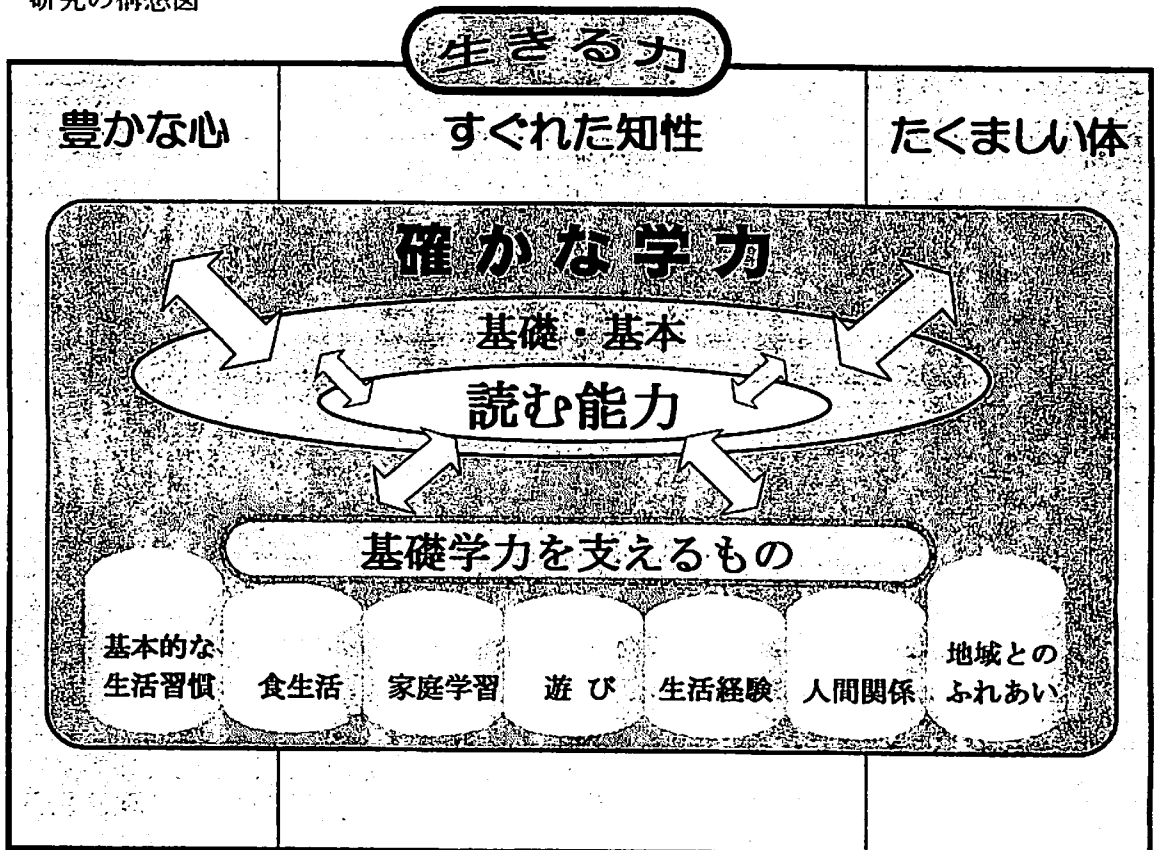
## VII 研究の実際

### 1 研究の基本的な考え方

#### (1) 言葉の整理

確かな学力	次の6つととらえる。 ①学ぶことへのやる気・意欲 ②自分で考える力 ③自分で判断する力 ④自分で表現する力 ⑤問題を解決し自分で道を切り開いていく力 ⑥知識や技能を身に付け活用する力
基礎・基本	各教科の基本的事項としての基礎・基本ととらえ、その中でも「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」ととらえる。
読む能力	意欲的に読書しようとする態度や文章の内容を目的に応じて的確に読み取り、自分なりの考えをもつ能力ととらえる。
基礎学力を支えるもの	基礎学力を支えるものとして、基本的な生活習慣・食生活・家庭学習・遊び・生活経験・人間関係・地域とのふれあい等があるととらえる。
個を生かす	児童生徒一人一人の特性(興味・関心、能力・適性など)や実態を踏まえ、児童生徒一人一人に応じた指導・支援を行うことととらえる。

#### (2) 研究の構想図



## 2 具体的実践

### (1) 授業研究班

#### ア 研究内容

昨年度は、説明文や古文指導において、「読む能力」を高めるために必要であると考えられる指導方法について研究を行い、一定の成果をあげることができた。そこで、本年度は、昨年の研究を生かし、さらに「読む能力」の指導方法を考えた。

(ア) 高原町内の児童生徒の「読む能力」の実態把握

(イ) 授業における指導方法・評価の工夫

- ・ 読解力を高めるための工夫
- ・ 音読指導の工夫
- ・ 評価の工夫



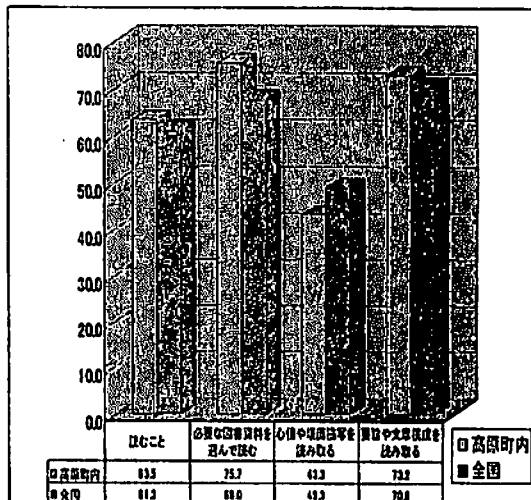
#### イ 研究実践

(ア) 高原町内の児童生徒の「読む能力」の実態把握

平成18年5月に実施した教研式学力テスト(以下、NRT)の結果より、町内の児童生徒の「読む能力」の実態把握と分析を行った。

右のグラフは、小学校6年生の国語科の「読むこと」に関する項目について、その正答率を全国と比べたものである。「読むこと」に関しては、全国平均を上回っているが、「心情や場面描写を読み取ること」は全国平均にいたっていない。他の学年についても同じような傾向が見られた。

中学校においても、どの学年でもわずかではあるが「読むこと」に関する項目についての正答率が全国平均を上回っていた。しかし、「叙述に即して心情や場面を理解したり、文脈における語句の意味を把握したりすること」を苦手とする傾向があった。



【小学校第6学年 NRT結果】

(イ) 授業における指導方法・評価の工夫

高原町内の児童生徒の実態から、本研究所で定義した「読む能力」の中でも、「文章の内容を目的に応じて的確に読み取り、自分なりの考えをもつ力」を高めることを目指した。そこで、小学校第2学年物語文「名前を見てちょうだい」、中学校第1学年詩「大阿蘇」の授業で「読解力を高めるための工夫」「音読指導の工夫」「評価の工夫」を検証した。

a 読解力を高めるための工夫

NRTの分析結果や児童生徒の意識調査から、心情や場面が読み取れない大きな原因として、言葉の意味が分からないということが明らかになった。また、読解力を高めるためには、文章の中の叙述に根拠を見つけ、正確に理解する能力が必要である。さらに、自分の読み取りに広がりや深みをもたせたり、自分の意見に自信をもたせたりするためには、他者の考えを積極的に聞くことが重要だと考えた。そこで、「語句の理解」「ワークシートの工夫」「話し合い活動の工夫」を通して、読解力を高めていくことにした。

(a) 語句の理解

語句の意味を理解させるために、一つ一つの言葉に着目させ、語句の意味を問う発問や確認するための動作化を取り入れた。また、中学校の授業では、積極的に辞書を活用し、語句の意味を調べさせた。

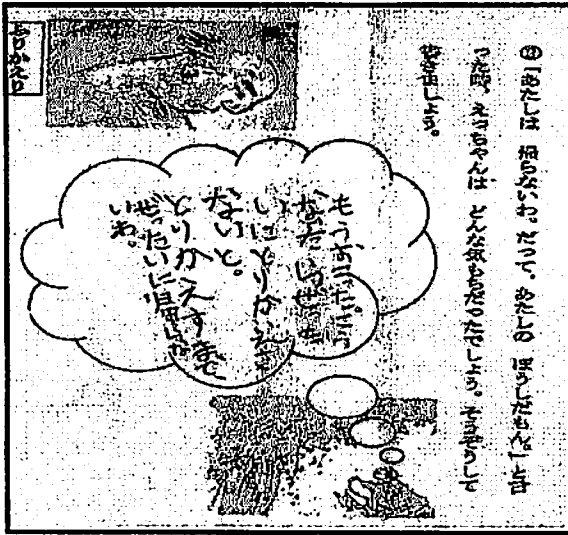
児童生徒は、語句の意味を正確に理解し、心情や場面を具体的に想像することができるようになった。



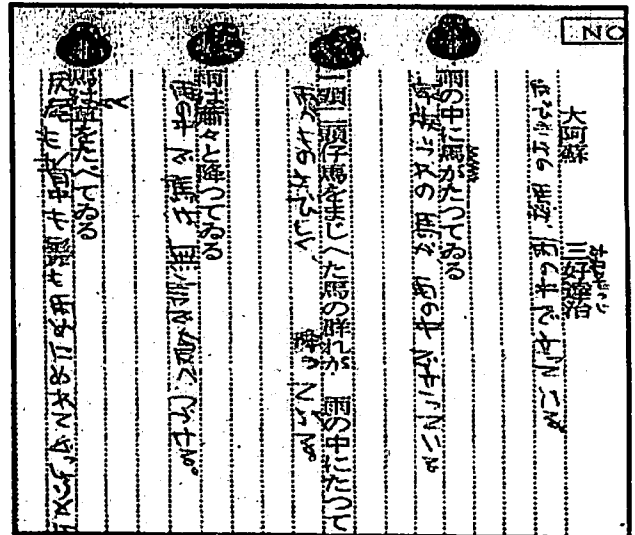
【辞書を活用して語句の意味を調べている様子】

(b) ワークシートの活用

本文の横に、心情や情景を書き込むことができるようなワークシートを活用することで、自分が読み取ったことと本文が見比べやすくなり、叙述に即して正確に読み取らせることができた。また、小学校においては、挿絵や吹き出しを取り入れたワークシートを活用したことで、児童がより登場人物の気持ちに近づくことができるようになった。



【挿絵や吹き出しを取り入れたワークシート】



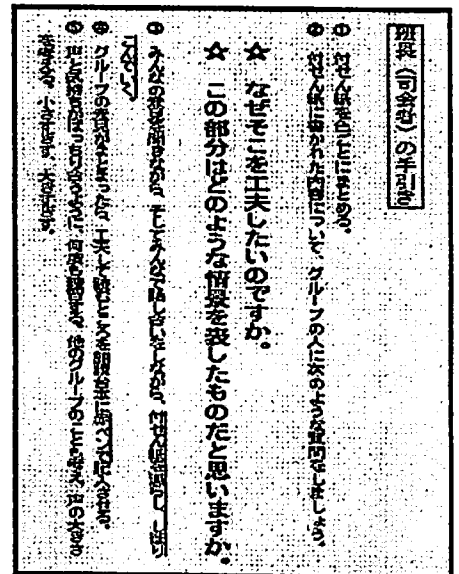
【心情や情景を書き込めるよう工夫したワークシート】

(c) 話し合い活動の工夫

中学校では、情景に対する自分の考えを深め、グループの朗読台本を作るために、話し合い活動を行い、互いの読み取りや朗読の工夫を聞きあうことができたようにした。その際、話し合いの方向を示し、意見を述べることを苦手とする生徒でも積極的に参加できるように、手立てを講じる必要があると考え、司会者用、発言者用の二種類の話し合いカードを用意した。

自分の意見を述べる際には、そのカードを活用し、互いの考えをしっかりと理解できるよう「どの部分をどのように工夫したか」「どの言葉からどのような情景を想像したか」を、必ず述べさせるようにした。

このことにより、話し合い活動が活発に行われ、読み取りをさらに深めることができた。



【中学校で活用した話し合いカード】

b 音読指導の工夫

声に出して読むこと、つまり「音読」のよさは、声に出して読み、耳で聞くことを通して文章の読みを深めることができることと、正しい発音ができるようになることである。

このことから、音読を行うことは、読解力を高めることにつながると考え、一単位時間の国語の学習の中で、多く取り入れることにした。

導入	姿勢や口形に注意させながら、はっきりした発音で音読を行うようにした。また、声に出して読むことの楽しさを味わわせることを意識して行った。
展開	主に内容理解のために行い、語や文としてのまとまりや内容・響きなどに注意しながら、取り組むようにした。
まとめ	学習範囲を再度音読し、学習したことを確認するとともに、読み取ったことを生かした表現をさせるようにした。

授業の中でこのような音読を積極的に取り入れたことで、児童生徒は、文章を読むことへの抵抗感をなくし、文章の読み取りに生かすことができるようになった。また、日常の家庭学習で行う音読の取組もよくなってきた。

- ① 発音発声練習をする。(高千穂峰の活用)
- ② 前時の内容を振り返り、本時の学習範囲を音読する。
- ③ えっちゃんの様子や気持ちを読み取る。
- ④ 読み取ったことをもとに、話し合う。
- ⑤ 気持ちを想像し、役割演技をする。
- ⑥ 本時の学習範囲を音読し、確認する。
- ⑦ 自己評価をし、次時の学習について知る。

【音読を積極的に取り入れた学習指導過程の例】



【本時の学習範囲を音読する様子】

c 評価の工夫

(a) 教師による評価

一単位時間の授業の中で、評価規準や評価基準を明確に示したことで、児童生徒の活動の様子を評価しながら指導に生かすことができた。



【読み取りにおける評価】

- (評価基準)
- A えっちゃんの様子や言ったことにサイドラインを引き、気持ちを想像して書いている。
  - B えっちゃんの様子や言ったことにサイドラインを引いている。
  - C 教師や友達の見解を聞いて、えっちゃんの様子や言ったことにサイドラインを引くことができる。

評価基準に沿って机間指導を行いながら読み取りができてきている児童のワークシートにシールを貼り、評価した。教師は、児童の読み取りの状況を把握することができた。また、児童の意欲付けにもつながった。

- ① 発音発声練習と本時の学習範囲の音読をする。
- ② 前時の内容を振り返り、本時の目標を確認する。
- ③ 朗読の工夫点(強弱、間の取り方)、台本の記入の仕方を確認する。
- ④ 朗読台本を作る話し合いをする。
- ⑤ ワークシートに感想を書く。
- ⑥ 自己評価を行い、次時の学習内容を知る。

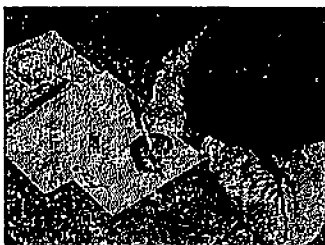
【話し合いにおける評価】

- (評価基準)
- A 自分の考えと他の人の考えとを比較して積極的に発言し、描かれている情景に対する自分の考えを深めようとしている。
  - B 自分の考えを発言することができる。
  - C 教師の支援により、自分の考えを発言できる。

話し合い活動の際には、上記のような評価基準を設定し、評価を行うことで、生徒一人一人の実態に合った支援を行うことができた。

(b) 自己評価・相互評価

自分の学習活動を客観的に見直すことができ、次の学習への意欲を高めることができるよう、単元を通し、毎時間、自己評価を行わせた。また、中学校では、友達の見解を受け入れ、自分の学習活動に生かすとともに、互いの読み取りのよさを味わうことができるよう、相互評価を取り入れた。



自己評価・相互評価シート

項目	1回	2回	3回	4回	5回	6回
1. 発音・発声練習	4	3	4	2	3	3
2. 前時の内容を振り返り、本時の目標を確認する	4	2	4	3	3	2
3. 朗読の工夫点(強弱、間の取り方)、台本の記入の仕方を確認する	4	2	3	3	3	1
4. 朗読台本を作る話し合いをする	4	3	3	3	3	2
合計	16	10	14	11	12	8

自己評価の記入欄には、生徒が自分の学習活動について感想や反省を記入している様子が見られる。

【自己評価・相互評価をひとつにまとめたワークシート】

## (2) 音読研究班

### ア 研究の内容

本研究班では、「読む能力」を高めるための手立てとして音読学習の充実を図ることをねらいに次のような研究を行ってきた。

#### (7) 音読の理論研究

- ・ 学習指導要領・教科書における音声表現に関する分析
- ・ 言葉の整理（音読・黙読・朗読・群読）

#### (4) 高原町音読集「高千穂峰」の作成

- ・ 音読資料集の作成
- ・ 音読資料集の活用状況の調査
- (ウ) 「高原町教育研究所通信」の発行



### イ 研究実践

#### (7) 音読の理論研究

小学校並びに中学校の学習指導要領において、音声表現（音読指導）に関する事項を洗い出し、音読や朗読、発音・発声等に関する基本的な事項を確認した。また、児童生徒が実際に使用している教科書の音読指導に関する事項をまとめ、学習指導に生かすようにした。

音読と黙読、朗読、群読についての言葉については、次のように考えた。

音読	文章を読むときに声に出して読むこと。
黙読	声に出さずに目だけで読むこと。
朗読	自分が読み取ったことを自分なりに表現して読むこと。 前回の学習指導要領では、「表現」領域の高学年の内容となっていたが、今回の学習指導要領では、「朗読」という文言が消えた。しかし、学習活動としては、高学年の「C読むこと」「オ…効果的な読み方を工夫すること」に含まれるであろう。誇張された抑揚や表現読みでなく、目的に応じた読み方を工夫することが望まれる。
群読	群読は、複数の読み手によって朗読する読みを指す。群読は、複数の読み手による表現の効果を生かす活動で、多分に演劇的な朗読であり、理解に資する、複数で声をそろえて読む「斉読」とは基本的に異なる。効果を生かすための「響き合い、聞き合い、学び合い」を尊重した学習過程を工夫することが大切である。

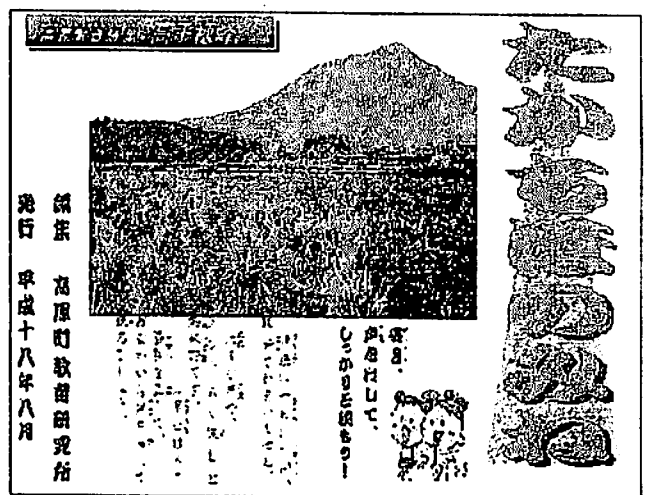
#### (4) 高原町音読集の作成と活用

##### a 高原町音読集の作成

児童生徒が授業や朝の時間、業間の時間、家庭学習等の指導で活用できる音読集を作成し、町内の全児童生徒と教職員に一部ずつ配付した。（9月）

##### (a) 音読集「高千穂峰」のねらい

- ① 児童生徒の学年に応じた教材文を音読させたり、他の学年の教材文や地域素材の文を音読させることで、読書や音読への興味・関心を高める。
- ② 毎日継続して音読に取り組むことで、「読む能力」の育成につながる朗読の技能や能力を高める。
- ③ 暗唱したり、文章にふれる機会を多くしたりすることで、記憶力を高め、語彙を増やし、語句の理解を深めるようにする。



(b) 音読集「高千穂峰」の作成のポイント

① 選定の基準

「学習指導要領の教材選定の配慮」をもとに、次のことに気をつけて詩や文章を選定した。

- ・ 伝え合う力、思考力や想像力及び言語感覚を養うのに役立つこと。
- ・ 生活を明るくし、強く正しく生きる意志を育てるのに役立つこと。
- ・ 自然を愛し、美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと。
- ・ わが国の文化と伝統に対する理解と愛情を育てるのに役立つこと。

② 音読集の名前の由来

音読集の名前は、高原町に関連するものの中から、シンボリックな存在である「高千穂峰」とした。そして、「高千穂峰」へ登山するように、一合目から順に山頂へ続く立て札を立てて、各学年で学習する文の目安とした。

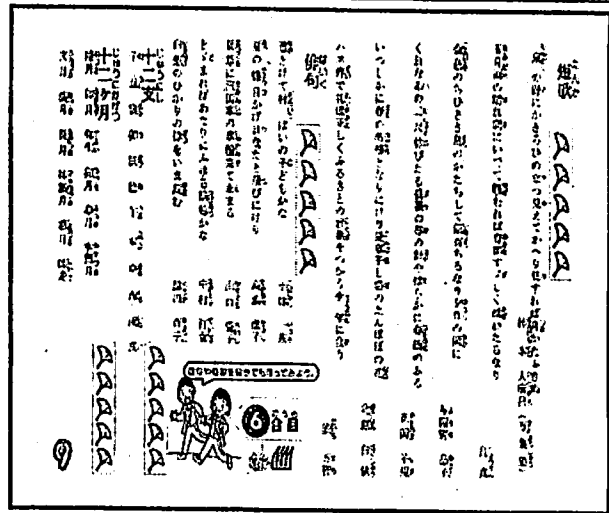
目 安	
1合目～2合目	→小学1年～2年
3合目～4合目	→小学3年～4年
5合目～6合目	→小学5年～6年
7合目～8合目	→中学1年～3年
9合目～山頂	→高原町にかかわるお話

③ 音読集の工夫

・ 15ページまでは、下の学年の子どもたちには、これからどんな文を学習するのが見通すことができ、上の学年の子どもたちにとっては、復習をすることができるように、小学1年から中学3年までの国語の教科書に掲載されているものから選んだ。また、授業で扱う教材文の他に、教科書の巻末にある発展学習の文章などからも選んだ。そのほかに、知識として知っておいてもらいたい内容として国語の教科書以外から、ことわざや慣用語、十二支、十二ヶ月なども掲載した。

・ 16ページから18ページにかけては、郷土に目を向けてもらいたいという観点から民話やお祭り、神話、郷土の歌など高原町に関する文章を掲載した。そして、高原町のホームページからいただいた写真等を利用し、町の木・鳥・花なども掲載した。

・ 何回読んだか分かるように、タイトルの下に、右のような五つのイラストをつけ、音読をしたら色をぬれるようにした。また、小学1年生にも読めるように、すべての漢字に読み仮名をつけた。



(c) 音読集「高千穂峰」の活用例

次のような活用例を示し、音読集の活用を促進してきた。

- ・ 国語の授業の中で、毎時間の始めに時間を設定して音読する。
- ・ 各学校で取り組んでいる基礎基本の時間や朝自習の時間等に、一斉に「音読」の時間として活用したり、その時間に取り組んだ内容が早く終わった児童生徒が活用したりする。
- ・ 始業前、登校した順に音読する。
- ・ 朝の会や帰りの会に音読タイムを設定して音読する。
- ・ 家庭学習の「読み声」に活用する。
- ・ 音読集会や学習発表会などの発表会などに活用する。

b 活用状況の調査

10月下旬に、音読集の活用状況の調査を教職員並びに児童生徒に行った。

音読集を配布して1ヶ月あまりしかたっていなかったため、音読集活用は、まだまだ十分ではない。しかし、音読集「高千穂峰」の中で、好きな文やよく読んでいる文もあり、少しずつではあるが読みを苦手とする児童生徒の音読活動への意欲を高めるきっかけとなっているようである。また、小学校から中学校までの内容や高原町の民話など多様な内容が載っていることでこれからの学習の見通しをもてたり、家庭における「読み声」においてもマンネリ化を防いだりすることができ、音読の充実化が図られてきているといえる。





## Ⅷ 研究の成果と今後の課題

### 1 研究の成果

#### (1) 授業研究班

- 語句の理解やワークシートの工夫など、読解力を高める指導や音読指導、話し合い活動の工夫を行うことで、児童生徒は進んで音読に親しみ、叙述に即して読み取ったり、自分の考えを深めることができるようになった。
- 評価方法を明確にし指導に生かすことで、児童生徒の実態を把握し、適切な支援を行うことができた。

#### (2) 音読研究班

- 町内の全児童生徒・教職員に音読集「高千穂峰」を作成・配付することにより、音読や読み声への関心が深まると共に、続きを図書館で借りて読む児童生徒が見られるなど、読書意欲の向上にもつながった。
- 「研究所通信」を作成・配付することにより、高原町研究所の活動や音読集の活用例を紹介することができ、町内全体で音読に取り組む姿が伺え始めた。

### 2 今後の課題

#### (1) 授業研究班

- 読む能力を向上させるためには、読み取ったことを表現するための「話す・聞く力」「書く力」をもっと高める必要がある。
- 自己評価や相互評価などの評価の工夫を行ったが、児童生徒の実態や学習の目標に応じた評価方法をさらに研究していく必要がある。

#### (2) 音読研究班

- 学校・学級によって音読集の活用状況に差が見られたため、より具体的な使用方法や活動例を、研究所通信や授業研究会等を通し、広く啓発していく必要がある。
- 本年度は全児童生徒及び教職員に配付のための予算は確保できたが、毎年新しいものを配付することは困難であるため、来年度以降の配付や補充を計画的に行っていく必要がある。

#### 【参考文献】

小学校学習指導要領	文部科学省
中学校学習指導要領	文部科学省
小学校学習指導要領 解説 国語編	文部科学省
中学校学習指導要領 解説 国語編	文部科学省
新中学校教育課程講座 <国語>	ぎょうせい
古典の授業活性化への道 月刊国語教育	東京法令出版
新しい国語を拓く教材研究・開発マニュアル 月刊国語教育	東京法令出版
「読むこと」の授業改革 ～「伝え合う力」をどう高めるか～	三省堂
「読むこと」の指導改善ハンドブック 月刊国語教育	東京法令出版
読みの指導改善の決定 月刊国語教育	東京法令出版
理解を深める表現読み	株式会社ルック
小学校国語学習指導辞典	東洋館出版社
新編 あたらしいこくご (1～6年)	東京書籍
新編 新しい国語 (1～3年)	東京書籍
音声言語指導大辞典	明治図書

#### 【研究同人】

所属	職名	氏名	所属	職名	氏名
教育委員会	所長	家高 清	高原小学校	研究員	吐師 裕子
教育総務課	研究指導員	深城 義治	広原小学校	研究員	園田祐一郎
教育総務課	課長	久保田芳人	狭野小学校	研究員	稲村 陽子
教育総務課	課長補佐	益本 一博	後川内小学校	研究員	岩元 君代
教育総務課	係長	松元 茂春	高原中学校	研究員	武田 和子
			後川内中学校	研究員	内田 朋代